様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	特別支援教育専攻 ／高原　光恵

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され，教員の研究費配分も厳しくなってきており，教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで，科研費申請に向けて，あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1．目標・計画

発達障害（疑いを含む）児の中でも書字困難のある児童への支援方法（査定方法、全身運動からのアプローチ、支援機器／福祉用具の活用、感情面の把握等）について検討する。
粗大運動、微細運動、協調運動の苦手さの度合いによりアプローチは変わる可能性があるが、教育、医療等、他分野の専門家に協力を求め、共同作業により進めていきたい。

2．点検・評価

研究テーマの主旨及び課題内容、助成金額、助成期間終了後の広報効果等、さまざまな条件を鑑み、最も適した研究助成の場として、公益社団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団にて行われている研究助成への応募を選択した。申請を行ったが、不採択となった。

Ⅰ－2．大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で，あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか，具体的に示してほしい。

1．目標・計画

専攻の一員として、広報活動を分担する予定である。
そのほか個人では、講義・講演などで専攻での研究活動（教育、医学、心理といった複数分野による協働が実施されていること）を紹介し、人的学習環境のメリットについても広報していきたい。

2．点検・評価

大学訪問、関係機関の学部生指導教員との情報交換など、大学院学生定員確保に係わる広報活動を行った。
そのほか、広報活動とは異なる業務での外出の際も、大学院の紹介を行ったり、受験に関心を示す学生への情報提供を行ったり、さまざまな機会において対応を行った。
次年度以降の応募者へ向けた広報活動として、在学生が係わる広報作業についても協力した。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

・教員間での情報の共有を図り，必要に応じて学生指導を行う。
・適宜，学生相談に応じ，必要に応じて関連の教職員と連携をとりつつ課題解決を図る。

2．点検・評価

学生本人への相談対応に加え、関係する複数の部署間においても適切な情報共有を図り、学生指導／教育的支援を行った。
また相談への対応についても適宜行い、職務の中でも優先順位を高めて対応した。

Ⅱ－2．研究

1．目標・計画

・特別支援に関連した調査研究を行う。
・他の専門家と協力して教育環境の整備・充実（特別支援）についての研究を進める。

2．点検・評価

附属の教員、療育センターの職員、他大学の研究者など複数機関の専門家とともに、特別支援教育分野における日々の教育実践に係わる研究を行った。
また、特別支援学校での教育実践において、特に福祉との関連が強い情報、具体物については、入手後、授業に活用したり、授業外でも関心ある学生への情報提供／相談対応を行ったりした。
そのほか、教育・保育、医療、福祉、行政等、さまざまな立場の専門家と協力し、シンポジウムを開催・運営した。

Ⅱ－3．大学運営

1．目標・計画

学内の各種会議に出席（代理としても含む）し，職務を遂行する。

2．点検・評価

入試、実習、各種教員会議に出席し、報告、連絡調整等、行った。
また、学部教務関連の書類作成、それに関する外部機関との連絡調整およびとりまとめ等、行った。
そのほか適宜、必要に応じて専攻内で職務の代行を担い、大学運営に支障を来さないよう職務を遂行した。

Ⅱ－4．附属学校・社会との連携，国際交流等

1．目標・計画

・附属学校との連携として，特に附属特別支援学校と教育研究において連携し，課題解決に努める。
・社会との連携として，鳴門教育大学教育支援アドバイザー講師に登録継続する。

2．点検・評価

附属特別支援学校と研究面および教育面において連携して取り組み、課題解決に努めた。
それらの活動については専攻内においても必要に応じて連絡・報告を行い、適切な情報共有となるよう努めた。
教育支援アドバイザー講師に登録し、逐次、派遣要請に応えられるよう各種業務の調整を行った。さらにその職務に関連した各種対応についても適宜、関連の専門機関と連携対応し、支援を実施した。

Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）

専攻内の教員と協力し、実習実施に係わる学外の教育機関との連絡調整、実習先確保、事前指導への対応などを行った。中には、本来、一教員または一授業担当者の窓口としてではなく、大学全体／実習専門の部署が行うべき職務内容と考えるものもある。しかし、学生にとっての不利益は極力避けなければならないこと、また実習校にとっても対大学よりも対窓口担当者であったほうが実際上の問題や要望を率直に述べやすいこと等、避けたいデメリットも通常では得難いメリットも経験できた点は有意義であったと考えている。毎年度のことであるが、本専攻・本専修以外の多くの学生の免許状取得に関して、専攻教員とともに、外部との連絡調整、課題解決に貢献していると思う。